

二〇二一年度 桐朋女子中学校入学試験

論理的思考力&発想力入試 言語分野

受 験 番 号

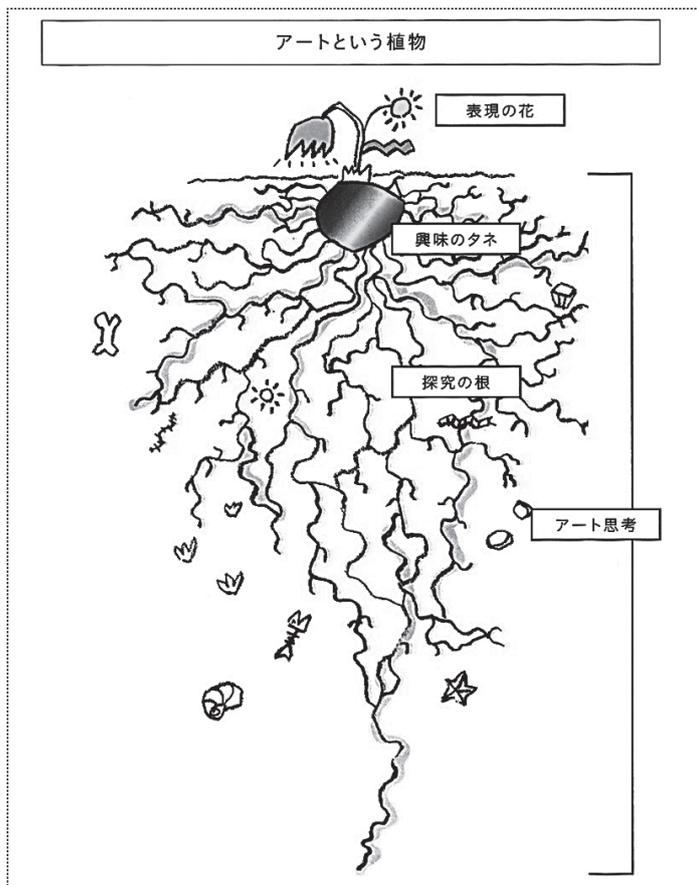
氏 名

【注意】

- 一、問題冊子が配られても、開いてはいけません。
- 二、問題冊子は1ページから6ページまであります。
- 三、「はじめてください」と言われたら、まず、問題冊子の表紙と解答用紙二枚と下書き用紙に、それぞれ受験番号と氏名を書きなさい。
- 四、答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 五、問題冊子に書きこみをしてかまいません。
- 六、「やめてください」と言われたら、すぐに筆記用具をおき、解答用紙も問題冊子も表を上にして、机の上におきなさい。
- 七、試験時間は五十分間です。

★次の文章を読んで後の問題に答えなさい。なお、字数制限のある問題に答える場合、「、」「や」「。」等の記号も一字と数えます。

これは、ある中学・高校で美術を教えている先生が書いた文章です。この文章は、「アートという植物」についての説明から始まっています。「アートという植物」は左の図に示されています。



この植物が養分にするのは、自分自身の内部に眠る興味や、個人的な好奇心、疑問です。

アートという植物はこの「興味タネ」からすべてがはじまります。ここから根が出てくるまでは、何日も、何カ月も、時には何年もかかることがあります。

このタネから生える「探究の根」は、決して1本とはかぎりませんし、好奇心の赴くまま好き勝手に伸びていきます。それぞれの根は、太さも、長さも、進む方向さえも違い、くねくねと不規則に波打ち、混沌としていきます。

「探究の根」はタネから送られる養分に身を委ね、長い時間をかけて地面のなかを伸びていきます。

アート活動を通りかすのは、あくまでも「自分自身」なのです。他人が定めたゴールに向かって進むわけではありません。

「アートという植物」が地下世界でじっくりとその根を伸ばしているあいだ、「地上」ではほかの人たちが次々ときれいな花を咲かせていきます。なかには人々をあっといわせるようなユニークな花や、誰もが称賛する見事な花もあります。

しかし、「アートという植物」は、地上の流行・批評・環境変化などをまったく気にかけません。それらとは無関係のところ、「地下世界の冒険」に夢中になっています。

不思議なことに、なんの脈絡もなく生えていた根たちは、あるときどこかで1つにつながります。それはまるで事前に計画されていたかのようにです。

そして、根が繋がった瞬間、誰も予期していなかったようなタイミングで、突然「表現の花」が開花します。大きな色も形もさまざまですが、地上にいるどの人がつくった花よりも、堂々と輝いています。

これが「アートという植物」の生態です。

この植物を育てることに一生を費やす人こそが「真のアーティスト」なのです。

とはいえアーティストは、花を咲かせることには、そんなに興味を持っていません。

むしろ、根があちこちに伸びていく様子に夢中になり、その過程を楽しんでいます。

アートという植物にとって、花は単なる結果でしかないことを知っているからです。

あと少しだけ、たとえ話を続けます。

世の中には、アーティストとして生きる人がいる一方、タネや根のない「花だけ」をつくる人たちがいます。本書では彼らを「花職人」と呼ぶことにしましょう。

花職人がアーティストと決定的に違うのは、気づかないうちに「他人が定めたゴール」に向かって手を動かしているという点です。

彼らは、先人が生み出した花づくりの技術や花の知識を得るために、長い期間にわたって訓練を受けます。学校を卒業するとそれらを改善・改良し、再生産するために勤勉に働きはじめます。

花職人のなかには、立派な花をつくり上げたことで、高

い評価を受ける人もいます。

しかし、どんなに精巧な花であっても、まるで蠟細工のようにどこか生氣が感じられません。

たとえ花職人として成功を収めても、似たような花をより早く、精密につくり出す別の花職人が現れるのは時間の問題です。そうなったとき、既存の花づくりの知識・技術しか持たない彼らには、打つ手がありません。

とはいえ、誰もが最初から花職人になることを志しているわけではありません。一度は自分の「興味のタネ」から「探究の根」を伸ばそうと踏み出したものの、道半ばで花職人に転向する人も多くいます。

なぜなら、根を伸ばすには相当な時間と労力がかかるからです。「これをやっておけば花が咲く」という確証もありません。その間、周囲の花職人たちは美しい花をどんどん咲かせ、地上でそれなりの成功を収めていきます。ほとんどの人は、途中で伸ばしかけた根を諦めて、花職人になる道を選びます。

「アーティスト」と「花職人」は、花を生み出しているという点で、外見的にはよく似ていますが、本質的にはまったく異なっています。

「興味のタネ」を自分のなかに見つけ、「探究の根」をじっくりと伸ばし、あるときに独自の「表現の花」を咲かせる人——それが真正正銘のアーティストです。

粘り強く根を伸ばして花を咲かせた人は、いつしか季節が変わって一度地上から姿を消すことになっても、何度

でも新しい「表現の花」を咲かせることができます。

「アートという植物」のお話におつき合いいただき、ありがとうございます。どうぞございました。

少々長くなりましたが、アートやアーティストが「なんであるか／なんでないか」が、なんとなくわかりただけだけではいいのでしょうか？

私がこのような比喩を持ち出したのには、2つの理由があります。1つは、あまりに多くの人が「アート＝アート作品」だと勘違いしているからです。いまお話ししたとおり、アートという営みにおいて、「作品」というのは地表に出ている「花」でしかありません。「表現の花」は最も目立つ部分ではありませんが、あくまでも一部分でしかないので。

もう1つの理由は、本書のテーマである「アート思考」について、イメージをつかんでいただきたかったからです。

単純化していえば、アート思考というのは、アートという植物のうちの地中部分、つまり「興味のタネ」から「探究の根」にあたります。

(中略)

◇

そこで最後に、アート思考が、なぜあなたに必要なのかについて、お話ししておきたいと思います。

わかりやすさのために、「美術」とはいわば正反対の教科である「数学」と対比しながら説明させていただきます。あらかじめお断りしておきますが、私は「数学」が不要だと主張するつもりはありません。あくまでもわかりやすくするため

に引き合いに出すだけです。どうかあしからず……。まず、数学には「太陽」のように明確で唯一の答えが存在しています。

たとえば、「 $1+1=2$ 」が正しいことは、すでにはっきりしています。個人が勝手に「いや、ひよっとすると『 $1+1=5$ 』なのかも……」などと疑う余地はどこにもありません。

まだ答えの見つかっていない事柄は山ほどありますが、必ずどこかに揺るぎない1つの答えが存在するというのが、この教科の基本的なルールです。数学はこうした「正解(＝太陽)」を、見つける能力を養います。

一方、美術(アート)は数学とはまったく違って、数学が「太陽」を扱うのだとすれば、美術が扱うのは「雲」です。太陽はいつもそこにありますが、空に浮かぶ雲はつねに形を変え、一定の場所に留まることもありません。アーティストが探究の末に導き出す「自分なりの答え」は、そもそも形が定まっておらず、見る人や時が異なれば、いかようにも変化します。

子どもは空に浮かぶ雲を飽きることなく眺めながら、「ゾウがいるよ」「あれ？ 巨人にも見える」「あ、トリになった！」などと「自分なりの答え」をつくり続けますよね。教科としての「美術」の本来の目的は、このように「自分なりの答え(＝雲)」を、つくる能力を育むことなのです。

これまでの世界で圧倒的に支持されてきたのは、前者の能力でした。「数学」は多くの場合、入試科目に入りますが、ごく一部の学科を除けば、受験生に「美術」を課す

ような学校はありません。

しかし、「どうやらこれだけではまずいことになるぞ……」  
ということに世の中が気づきはじめています。この背景になっ  
ているのが、いわゆる「※VUCAワールド」と形容される現代  
社会の※潮流でしょう。

(中略)

『敷かれたレールに従っていけば成功できる』という常識が  
通用しない世界になった」という※警句は、以前からずいぶ  
んといろいろなところで聞かれるようになりました。だからこ  
そ、ここ10年くらいは「時代の変化にいち早く対応しなが  
ら、『新しい正解』を見つけよう」というのが、お決まりごと  
のように語られてきたのです。

しかし、現代のようなVUCAの時代にあつては、もはや  
このやり方すら役に立ちません。どんなに変化にすばやく  
食らいつこうと思っても、もはや追いつけないほどに世の中  
の変動が激しくなってしまったからです。たった1つのテクノロジ  
ーが、全世界の枠組みをまるごと変えてしまうようなこと  
も、もはや珍しくありません。

世界が変化するたびに、その都度「新たな正解」を見つ  
けていくのは、もはや不可能ですし、無意味でもあるので  
す。

ここにさらに追い打ちをかけるのが「人生100年時代」  
です。私たちはこんな不透明な世界に、これから永きにわ  
たって向き合っていかなければなりません。

なかでも、子どもたちには深刻な話です。なんと「200

7年に生まれた日本の子ども半数が、107歳よりも長  
く生きる」という報告もあります。本書執筆時点で13歳  
の人が107歳になるのは西暦2114年、22世紀です。  
そのとき、いったいどんな世の中が訪れているか予測するこ  
と  
はできるでしょうか？

もちろん、大人も事情は変わりません。もはや「これさ  
えやっておけば大丈夫！」「これこそが正解だ！」といえるよ  
うな「正解」は、ほとんど期待し得ないからです。

そんな時代を生きることになる私たちは、『太陽』を見  
つける能力」だけでは、もう生きていけません。むしろ、人  
生のさまざまな局面で「自分なりの『雲』をつくる力」が問  
われてくるはずですよ。

(末永幸歩 『自分だけの答え』が見つかる13歳からの  
アート思考』ダイヤモンド社)

※注

混沌——これからどう変化するのか、見通しの立た  
ない様子

称賛する——言葉でほめ、心の底から感心すること

脈絡——つながり・関連

精巧——細かい点まで注意が行きとどき、よくでき  
ている様子

蠟細工——蠟を使って細工をした作品

既存——すでに存在すること

正真正銘——本物であること

VUCA——あらゆる変化の幅も速さもバラバラで、世

潮流——時代の傾向  
界の見通しがきかなくなったということ

警句——短い中に物事の真実を含ませた言葉

〔問題 1〕本文では「花職人」が「アーティスト」と比べられ

ています。「花職人」が「アーティスト」と決定的に異なっている点を分かりやすく説明している一文をぬき出し、最初と最後のそれぞれ五字を答えなさい。

〔問題 2〕——線部「アート思考」というのは、アートという

植物のうちの地中部分、つまり『興味のタネ』から『探究の根』にあたります」とありますが、「アート思考」を説明した次の文の（ ）にあてはまる言葉を本文中から二十五字以内でぬき出して答えなさい。

アート思考とは、（ ）をもとに自分のものの見方で世界をとらえ、自分なりの探究をし続けることである。

〔問題 3〕筆者は、数学や美術を学ぶことで養われるのは、それぞれのような能力であると述べていますか。それぞれ二十五字以内で説明しなさい。

〔問題4〕次の文章は、三ページの◇から本文の最後まで  
の部分をもとめたものです。①～④にあてはまる  
語句を本文中からそれぞれ指定された字数で  
ぬき出して答えなさい。なお、同じ番号の（  
には同じ語句が入ります。

ここ10年くらいは（①五字）に対応しながら  
（②五字）を見つける力が必要だった。しかし、  
VUCAの時代と表現される（③二字）ので  
きない現代では、世界が変化するたびに（②）  
を見つけないのは不可能・無意味である。そのため、  
「アート思考」による「自分なりの『雲』をつくる  
力」つまり「自分なりの（④二字）をつくる力」  
が必要なのである。

〔問題5〕  
資料には、デレック・カヨンゴという人物について  
の話が紹介しょうかいされています。彼は「グローバル・ソー  
プ・プロジェクト」という「表現の花」を咲かせまし  
た。この「表現の花」を咲かせるにあたり、彼はど  
のような「興味の花」を持ちましたか。また、そ  
の「興味の花」からどのような「探究の根」を伸  
ばしましたか。それぞれ書きなさい。

★ここからは、あなたの考えを述べる問題です。

〔問題6〕あなたの「興味の花」は何ですか。また、「興味  
の花」を持ったきっかけは何ですか。そこからど  
のような「探究の根」を伸ばしたいと思いますか。  
後の（1）～（4）の条件を満たすように、原稿  
用紙の使い方によって、三百五十文字から四百  
文字でまとめなさい。

《条件》

（1）第一段落は次のように始めること。

私の「興味の花」は～である。

（2）第一段落に「興味の花」を持ったきっかけであ  
る経験や出来事を具体的に書くこと。

（3）第二段落には、「興味の花」からどのような  
「探究の根」を伸ばしていくかを書くこと。

（4）「探究の根」については今のあなたにできることを  
具体的に書くこと。

〔問題5〕にある資料は、エイミー・E・ハーマン『観察力を磨く 名画読解』の一部（約千字程）を抜粋したものです。

著作権の関係上、掲載することができません。ご了承ください。